

インタangible生成過程に関する経営倫理インディケータ数理モデル

～価値連鎖型組織モデルにおける価値—搬移転可能性、エシックスドライバー—搬定義、その工学評価～

逸見 彰彦

(株)マーケティング総合設計研究所 〒180-0001 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-1-10-205 faridatky@hotmail.com

あらまし

インタangible生成過程の動的生成評価問題は、特殊な割引|現在価値評価尺度尺度問題と同様に、価値連鎖型モデルにおける組織生成価値性を割引担保する動的な試論の位置を占める。本議論は、組織内の統制倫理モデルの移転可能性、組織合理性自体の移転可能性に付いての経営倫理学論として試みられるべき経営工学論との境域、空白議論をバリュードライバー設計により示そうとする。経営倫理学としてのインタangible問題に関して、学知としてのスコピックな境域性、および可視化モデルとしての学知分担境域性について論じる。管理会計モデルでは、モデリングにおける統制情報の実装可能性が制度拘束要因になっているにもかかわらず、活動管理会計、行動管理会計における知識システムへの一次的な実装限界性に基く部分的統制情報のインストーラビリティが、詳細化されているにすぎない。これに対して、技術的な実装については、数理解決モデリング、およびニューラルコンピューティングモデリングにより二次拡張性のあるものとして開発可能ではあるが、同時に劣位のマイノリティ集群、および組織制度化が劣位の集群についての動的なドライバデザインが存在していない。本報告においては、ニューラルモデリング、数理解決モデリングにより二次的に知識システムのセマンティクス構造に変換した組織内に不定位な下部組織モジュールを対象として設定することで、遺伝的アルゴリズムを用いたエージェント探索により連牽される組織情報が知識システムとして生成可能となることを述べる。

<キーワード>ニューラル理論、遺伝的アルゴリズム、行動管理会計理論 非再帰マルコフアクティビティ形成モデル

Intangibles productive processes and principal business based ethics drivers

～Value chain management engineering and business ethics program based rural drivers～

AKIHIKO HENMI

Marketing Grand Design Laboratory inc. faridatky@hotmail.com

Abstract

In this paper, I intend to describe measurmentability about problems between valuations and business administration based intangibles buildings. In this paper I try to pick up points which were operated according to on versus, micro administrative decisions. These decision processes were usually obligated to productivity processes about intangibles which should be shown alongside with agent organization buildings and agent management controll ethical building. Further, I intend to describe some network architectual views about installable syntaxual invisible tacitly accounting elements which should be planned according to common knowledge system structures under non descreate conditions. And, I intend to describe some semistrog form reforming views about installable syntaxual invisible tacitly accounting elements which should be planned according to common knowledge system structures. This paper shows that quadratical conversion from SCM or EAI based non descreate syntaxual organizational conditions toward semantic knowledge geometries can be describe by adoptable Kullback - Lieber conversion models as valuation models.

<<Key words>> Newral network theories Genetic algorithm Activity management accounting Non revival marcov chain model

序節

インタンジブルズ問題は、無形資産評価のプリンシパル責任から生じる会計上の価値評価問題として位置付けられている。即ち、インタンジブルズ問題は、割引現在価値評価価値尺度性と同様、価値連鎖型モデルにおける組織生成価値性を割引担保する動学的な試論の位置を占める。本議論は、組織内の統制論モデルの移転可能性、組織合理性自体の移転可能性に付いての経営倫理学論として試みられるべき経営工学論との境域、空白議論をバリエードドライバー設計により示そうとする。経営倫理学としてのインタンジブルズ問題に関して、学知としてのスコピックな境域性、および可視化モデルとしての学知分担境域性について論じる。本報告は、会計上規定されるインタンジブルズのマーケティング生成過程を、周縁域インタンジブル再投資過程において、装着すべき組織特性として再定義化、計測モデル化を図る。その上で本報告は、大域的再投資環境において、対象となるクライアント エージェント階層における過重階層化環境下における組織構造上のシンタクス要素と、異なる組織構造上のシンタクス要素との計測議論接合の開発、および、一定の局部化したエージェントベースのマーケティング意思決定情報交換性に関する組織モデルを示す。インタンジブルズ問題における組織統制情報の生成、機能、蒸着問題は、Lev⁽¹⁾、Menga、Pamela⁽²⁾らによって点描されている。Menga、Pamelaらの議論は、組織制度評価に関するスコアカード、ドライバー、インディケータベースの組織統制情報の生成、機能、蒸着問題議論は、多組織文化間の経営倫理プリンシパル可測性に関してはスコープに劣位である。本報告は、エージェントとして操作可能な、二次的なポートフォリオ上に見れるセミストロングフォームを二義的に形成する一定のウィークフォームを表わす、組織倫理ドライバ設計に関する議論である。また本報告は、インタンジブルズの生成過程において、殊に異なる組織構造を連結する SCM、EAIモデルにより形成されるインタンジブルズの生成過程の形成過程に関しての組織倫理の理論的な計測化に関する議論である。

[1] スコピックジャンプの再定義化、議論すべき一搬不可能性、及び計測化モデル

アソシエーションモデルなる組織システム定義は、Togbil、Etzioniらに求められるものである。構造機能主義的定義の詳細化に関して、は、Pestof、Lipietz、Lipkin、Salamon⁽³⁾らがそれぞれ論述している。彼らによればアソシエーション組織モデルは、資本の労働に関する手段性従属性を前提とした権限、組織倫理環境を持つ社会組織あるいはその集合体であって、かつ市場と公的政府機関の媒介機能を有するフォーマルな組織体を指す。また R.M. Mackeiver はアソシエーション組織の目的とする共益的機能は、純公的機関の下位従属セクタとしての限られた目的合理的利益社会構造に相対するものであり、非営利共益行動を媒介とする連結性組織体であると定義している。即ちアソシエーション組織定義は、人間を直接目的合理的に再組織化する事によって構築する人的集合体定義議論の類型として位置付けられる。本稿においては実装化計測対象定義与件環境として、外的連率統制情報を多く議論に含むアソシエーションモデルを念頭に置き、以下の大域与件化を設定する。

<1> 情報享受能力において選別頻化されるエージェント集合でなく、組織化されたエージェント集合として高次の知識能力を予期出来る事、

<2> 高次の情報創出能力の予期性を持つエージェント集合に対するセマンティックモデルの最適化はそれ自体動学的でなければならないため、エージェントモデル自体の最適化は動的である。

<3> 高次の情報創出能力を予期されるエージェント集合におけるエージェントスカラ量は可変可能なものと定義される。

以上の大域的与件化を前提とした議論を行う必要がある。即ち、議論すべきモデルは、機能主義的議論によれば、情報取引モデルに対し機能転置性を持ち、単義性を持つエージェントモデルで説明が十分可能でないモデルである。かつエージェントモデルは、相対的機能関係を必ずしも自らの外部環境因子からのみでは確定入力されない、会計学のウォーレン・モートンらは、セマンティックネットによるフレーミング技法により、知識データベース検索を目的とするシナリオモジュール構造を示している。会計学の Prakash、Rappaport⁽⁴⁾ は外部会計環境エージェントの反射的機動行動モデルを情報インクダンスモデルとして定位しているが、情報インクダンスモデルにはエージェントクライアントの不特定多数の効用意思決定が存在し、同時に一搬不可能性が存在する。本議論においては、外部システムからの連率行動も包括するクライアントエージェント間の意思決定交換性のうちシンタクシユアルな、白色ガウス平面を、複数のKLダイバージェンス間の連続的な同軌性により、セマンティックなガウス関数として二次的に発見、再定位可能である事を示すこととするが、インストーラビリティの観点から議論すべきアルゴリズムビルディングの適格性から見る場合、本解法以外にも、Super Descreate Mathematical Units を蒸着させる視角が既に、ガウス空間上の極大個の離散事象の計測議論として存在する。

[2] クライアント エージェント集群設定と、価値化に関するパラメータ設定対象主体に関する基本議論

提供する条件情報の重み付き情報を条件情報の尤度への貢献度 w_1 とすると、データに仮定されたインタメディアータを $P(x): \theta \in Z$ 、セマンティックス平面空間モデルを $q(x)$ とすると、データに仮定された エージェントモデルは、Kullback-Leibler ダイバージェンスにより、

$$KL(p, q) = \int p(x) \log \frac{P(x)}{q(x)} dx$$

$$\Sigma KL = \int P(x) \log \frac{P(x)}{\prod_{i=1}^m P_i(x)} dx$$

この場合、自己組織化が クライアント エージェントモデル $p(x)$ において進行するとすると、

$$W1(\theta n) = \underset{\theta \rightarrow 0}{\operatorname{argmin}} \operatorname{KL}(p|q)$$

は近似的最尤推定量となる。即ち、条件情報 θ に関する最急降下方向でパラメータスカラ θ に関して

$$-\frac{\partial L(\theta)}{\partial \theta} = 0$$

$$\frac{\partial \theta}{\partial \theta}$$

となるセマンティック平面スカラが存在し、リラクタントなランダムウォークに関する計測性が不能点を持つ可能性がある。この最尤推定量による計測関係に付いてローカルミニマム問題を回避する自己組織化計測を行うとすると、少くとも

$$-\frac{\partial L(\theta)}{\partial \theta} \neq 0$$

$$\frac{\partial \theta}{\partial \theta}$$

となる θ を常に持つためには、 $\partial \theta$ が 0 でないセマンティックなクライアント エージェントを常時持つ必要がある。即ち、クライアントエージェントにおけるセマンティクスおよび他の条件付相互関係的な情報をエージェントモデルが連続的に処理出来るように、

$$\theta(t+1) = \theta(t) + \beta \frac{\partial \log p(y(t); x(t); \theta)}{\partial \theta}$$

とランダムなリラクタント連続体モデルを表わす事が出来る。複数のスペクトル信号の独立性を上記と同じく Kullback-Leiber ダイバージェンスによって測定しようとするならば、スペクトル信号相互の独立成分の周辺密度の代わりにスペクトル信号密度関数を用いた Kullback-Leiber 推定量の最尤推定量の最小化で求める事が出来る。即ち、あるスペクトル信号の確率密度を $R(x)$ とするとき、

$$\operatorname{KL}(W) = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \log \frac{R(x_i)}{\det(W) \prod_{i=1}^m R_i(W_i(t))}$$

の最小化が最尤推定量となる。

ところが、ここで測定されるべき経営主体エージェント集合の階層コンポーネント性を Kullback-Leiber 推定量の同階層化された情報時層別モデルとして、Green and Silvesters の Kullback-Leiber Joint Quantal Model として表現すれば、求める層別モデルとして、最尤推定量の最小化によって検定すべきモデル $\operatorname{KL}_d(W)$ は、

$$\begin{aligned} \operatorname{KL}_d(W) &= \sum_{r=0}^n \pi_r R(x, \omega_r) \\ &= \sum_{r=0}^n \frac{1}{\{2\pi(\sigma_{nr}^2 + \sigma_{\omega}^2)\}^{1/2}} \frac{\exp\{-x \cdot r q\}^2}{2(\sigma_{nr}^2 + \sigma_{\omega}^2)} \end{aligned}$$

担し、 $\pi_r = NC_r P_n(1-p)$

N_r : binomial

$$\text{or } \pi_r = \frac{m^r e^{-m}}{r!} \quad \text{Poisson}$$

この時、 $m (=N_p)$: mean quantal content N : number of active release sites

$$\begin{array}{ll} p: \text{release probability} & q: \text{quantal size} \\ \sigma_{\omega}^2: \text{quantal variance} & \sigma_{\omega}^2: \text{noise variance} \end{array}$$

ここで求める層別スペクトルモデルは、上記与件の階層性とともに特異点も持つ、意思決定情報交換性の、Kullback-Leiber 情報量による計測は、密度推定関数の相互情報量モデルの導出に置換出来るから、密度推定関数 $\operatorname{CI}(X)$ は

$$\operatorname{CI}(X, W) = \log(p_X(X)) - \log(\det(W) \prod_{i=1}^m \operatorname{CI}_i(W_i, X))$$

即ち、射影一次同次問題として議論可能かつ、非対面環境領域への拡張域を含む密度推定関数 $\operatorname{CI}(X)$ の相互情報量が相互情報交換環境域における密度推定関数の相互情報量以下もしくは等しくなる場合を、ポートフォリオ環境下の相互情報交換環境上既知コントロール領域とする事が出来るように、密度推定関数 $\operatorname{CI}(X)$ で密度推定関数の相互情報量 $D(W)$ は、

$$D(W) = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \log \frac{P_X(X(t))}{\det(W) \prod_{i=1}^m P_i(W, X(t))}$$

であるから、最尤推定法により、

$$\operatorname{PIN} D(W) = \max \int \sum_{i=1}^n \log \frac{P_X(X(t))}{\det(W) \prod_{i=1}^m P_i(W, X(t))}$$

$D(\operatorname{CI}(X)) \geq D(W)$.

の最小二乗誤差を求める事で、求める拡張域を持つ密度推定関数 $\operatorname{CI}(X)$ を求める事が出来る。

垂下的なエージェントの行為単位ベクトルを $R(X)$ 。ランダムウォーク が出発点に戻らない 確率を q とすれば、単位ベクトル関数 $R(X)$ の微分

化による単位ベクトル関数 $\lim R(X)$ の集合 $\Sigma \lim R(X)$ は、

$$q=0 \rightarrow \sum_{n=0}^{\infty} \dim(R(X)=0) = \infty \quad (1)$$

$$q>0 \rightarrow \sum_{n=0}^{\infty} \dim(R(X)=0) < \infty \quad (2)$$

$$\sum_{n=0}^{\infty} \sum_{k=0}^{\infty} (R(X)=0) < \infty \quad (3)$$

(1) の条件の時密度推定関数 $R(X)$ の単位ベクトルはマルコフ連鎖モデルとなる。Pitt は確率分布空間 Z_d 上のランダムウォークに関する大数の法則を、時刻 n までの $R(X)$ の単位ベクトルの訪問スカラ点を Q_n とすれば、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{Q_n}{n} = q^2$$

で全ての非再帰的ランダムウォークが成立する事で示しており、また、Erdos Taylor は、上記(1)によるマルコフ連鎖による再帰的ランダムウォークが成立する確率分布平面 Z_d 上による大数の法則に関して、

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \frac{(\log n)^2 Q_n}{n} = \pi^2$$

但し、この場合、比較的独立な確率変数列の部分和として確率分布空間 Z_d が表現出来る場合に限定される特殊再帰的比較的ランダムウォークに関する大数の法則に該当する。Erdos Taylor の特殊再帰的ランダムウォーク定義は、本稿議論に適用可能である。

非再帰率 $q=1$ の単位ベクトル関数 $\lim R(X)$ の集合 $\Sigma \lim R(X)$ を含む特殊再帰的ランダムウォークポロスイ空間を前提としてエージェントの空間の定義を行うとすると上記定義により、エージェント集合数が有限である場合、即ちポロスイ空間を部分空間として使用する場合のエージェント空間は、

$$\Sigma Q_n = 2 \int_{n^m}^m \frac{n^n}{\log n} = -2\pi \int_n^m \frac{\log n}{n} < \pi^2 \quad (4)$$

(4) で示される経営主体エージェント空間において意思決定情報交換性の、Kullback-Leiber 情報量による計測即ち、密度推定関数の相互情報量モデルを示すとすると、和分相互情報量は、

$$D(W) = \frac{1}{n} \sum^n \log \frac{P_X(X(t))}{n^{-1}} = \frac{1}{n} \log \det(W) \prod_{i=1}^m P_i(W, X(t)) \quad 2 \log n$$

本稿で議論とする経営主体エージェント階層型環境は唱道過程論として垂下的に統制化される過程モデルであって、内部連鎖するエージェントスカラ数は限定化され、かつ一定のエージェント連鎖モデルが外部環境について未受容な事も想定される。

[3]. 会計モデルに付加される両義性クライアント定義と、需要連鎖下で想定される特性

実体環境における自律的マネジメント特性により従来の連続平面としての会計システムモデルとしての議論に含まれない非定形的行為を含むものとなる経済学的なエージェントは、単義性を持つクライアントモデルで説明が十分可能でないモデルを持つ。ポートフォリオ内部の共有知識情報階層は、それ自体既往の慣習、移入法理議論性により整序されるため、分割定義されるべきエージェントはオープンソースネットワークとして動態的に定義される特殊シンタクスモデル即ち、組織倫理モデルとして知識表現される。ここで述べるエシックスモデルには、階層的紐帯性がある連鎖衡量による類別性定義による間の集群化に基づいた計測開発が必要である。また、第二にナレッジエンジニアリングの低位階層の問題としてのインスタンスとオブジェクト関係、即ち、インプリケーションベースの可視化に付いての詳細なディスクリプションに基づくモデリングに付いて、クライアントの定型的階層によって異なるものが配置される。即ち、可視化はそれ自体、セマンティック階層により異なるモデリングデザインによって再構成され、可視化の文脈による白色性が分割されなければならない。第三に、第一・二点で明示したクライアントインタミディエータ特性は、需要特性スプレッドの多様性を前提とする。

空間連続性による割引効用を

$$f(\theta),$$

$$0 < \theta < 1$$

とし、 θ がセマンティック空間密度を

$$\theta_{-1}$$

とするとすると、そこでのエージェント部分集合 x, y の効用関数は、空間内でのエージェントの情報獲得性であるから、

$$U(x) = f(\theta_{-1}),$$

$$U(x, y) = U(x, \theta, y)$$

但し、あるセマンティック管理会計空間階層のエージェント部分集合を $club(x, y)$ のとき、

$$U(x, y) = U(f(x, \theta_{-1}), \theta, y).$$

期待利益 $P(x, y)$ は $\theta_{-1}=1$ となる時求められるとすると、

$$P(x,y)=U(\theta(\theta_{-1}=1),0,y).$$

このとき、割引効用 θ は、階層オーバーラップなセマンティック空間モデルでは、連牽型情報群の事象特異性により、クライアントにとって質的な要素ばかりが並んでいると言えない。セマンティック管理会計空間要素特性を一定とすれば、

$\theta = 0$ の時 P

本対象管理会計は、複数空間の階層オーバーラップモデルであるから、

$$\text{Maximise}[\int U(\alpha)]$$

は各空間階層のセマンティック有意な密度 θ_{-1} の SME モデルの最大値

$$\text{Maximise}[\int U(g(\theta_{-1}))]$$

により求められる。この場合、基本的に、連続空間層平面を構成するとされる各平面の θ_{-1} の密度数列には有限性から和分相関性が存在する事は明らかである。連続平面としてインクダンス平面であるセマンティック重空間層を定義したとしても、学知有限性と、その動的的な増分性により、離散型効用モデルとして逸失コストを定義する事が出来る。

[4] .バリュエーションモデルに付加される.射影一次同次問題とエシックスドライバー

バリュエーションに際し、エージェントモデルをインクダントな重層的会計平面群と見るならばエンドースメント連牽性は、連牽性を表現する測地モデルがエンドースメント外部主体からの情報を歪曲化なく伝達しうるかという射影計測問題として表現出来る。クライアントエージェント、非正規性が支配するセマンティック大域平面間の相関関係は、クライアントエージェント機能をセマンティックフレーム階層に対する球状化エージェントとする復元過程である。復元行列の直交性は、Kullback-Leiber 情報量による統計的距離問題として説明出来る。即ち、 m 平坦性と e 平坦性の間の射影の一意性問題である。通常多変量線形解析問題における m 平坦性は同値の平面多様体モデルとして幾何化されるから、 m 測地線と e 測地線は同値となる。

$$m \text{ 測地線 } r(X,t)=(1-t) \cdot p(X)+t \cdot q(X),$$

$$0 \leq t \leq 1.$$

担し、 $p(X)$ は m 平坦性の密度関数、 $q(X)$ は e 平坦性の密度関数とする。

$$e \text{ 測地線 } \log(X,t)=(1-t) \cdot \log p(X)+t \log q(X) \cdot \phi(t)$$

$$0 \leq t \leq 1$$

担し $\phi(t)$ は $r(X,t)$ が非正規性が支配する大域会計計測言語性として設計される為の正規化因子であり、Kullback-Leiber 情報量によれば

$$\phi(t)=\log \int p(X) 1-t q(X) dx.$$

即ち、

$$r(X_t)=\log(X_t) \text{ a.e. ならば } \phi(t) \geq 0 \text{ かつ } \phi(0)=0$$

でありこの恒等式を満たす時のみ m 測地線と e 測地線は同値となる。実装するべき KL 同次構造方程式は、 $p(X), q(X)$ 管理会計平面とすると

$$KL(p,q)=\int p(X) \log \frac{p(X)}{q(X)} dx \quad \Sigma KL = \Sigma \int p(X) \log \frac{p(X)}{\prod_{i=1}^m P_i(X)} dx$$

担し $KL(p,q)$ は単相階層モジュールインクダンス ΣKL はポートフォリオモデル全体のインクダンス密度となる。 ΣKL による全体のインクダンス密度と、各エージェント経営主体階層毎のトランザクション KL インビダンスの相関により、価値連鎖モデル上の最適相互情報量、即ちエージェントが持つクライアントに対する最適歪み値が決定される。最適相互情報量は、外形性の有視化が図られ相互情報量を計測する場合と、セミパラメトリックモデルとしての推定関数モデルを適用する場合が存在する。第一の相互情報量モデルは KL 情報量モデルによるダイバージェンス推定モデルであり

$$\text{Account}(\Sigma p)=\Sigma KL(p)+E_{\theta} \int \int p(X) p(Y/p(X)) \log P_{\theta}(Y/p(X)) \frac{dx}{\nabla P_{\theta}(Y/p(X))}$$

担し、確率密度 $\Sigma \theta$ によって表わされる平面集合 $\Sigma p(X,Y)$ は二次確定平面であり $\Sigma E \theta$ が推定精度誤差として KL 検定される。第二のセミパラメトリック相互情報量モデルは、非可視的な周辺密度関数がクライアントエージェントからの逆問題として既知量 $g(X)$ として管理会計言語上算出されるとすると

$$\text{Account}(\Sigma g)=\int g(X) \log \frac{g(X)}{\prod_{i=1}^m g_i(X)} dx$$

$$g(X)=a \exp -\frac{1}{2} X^2$$

4

担しこの $g(X)$ モデルは sub-Gaussiann Model (Jutten and Herault (1989)) であり白色ガウシアン情報量が比較的軽い場合に適用可能である。

本議論はあくまで管理会計言語算出モデルであるから、クライアントエージェントにおける白色ガウシアン情報量は、漸進的変化を辿る事が明らかに推察される。即ち、4次キュムラント、尖度が負である sub-Gaussian Model である。Account_i(Σg)は変数変換出来るから、

$$\text{Account}_i(\Sigma g) = \int \text{px}(X) \log \frac{\text{gx}(X)}{\text{det}(\Sigma g) \prod_{i=1}^n \text{gi}(X)} dx$$

即ち、ポートフォリオモデルにおける大域化条件とは、計測すべき管理会計情報であるセマンティック情報の交換可能条件ではなく、複数に境界化された連率統計情報の需要スペクトルへの交換化最適条件を求める事と同値である。

[5] エージェント探索、集群決定論としての測地同定モデル

[1] 本議論において、与件として照射されるべき実体表現性

本議論において、照射されるべき会計モデルは、所与のエンドースメント対象エージェント集合が存在し、当該する対象エージェント集合に関するクライアント側からの媒介制約が存在しないという仮説環境に基づいたものである。少くとも、会計計測組織に関する外生クライアント行動は、組織の再設計過程と独立したものであり得ない。その際、起用される再帰モデルは、残差として再配分と再管理の社会資産連続性を含んだものに過ぎず、会計言語性を持たない組織行動情報を含むものとならない。対象合理かつ目的合理的な探索モデルは、エージェント意思決定過程の実体表現性から再議論されねばならない。

[2]. エージェント探索モデルにおける有意水準制約付状態空間モデル

本論で述べる外生クライアントの意思決定過程を観測対象とする遷移過程における平滑化モデルは、状態として観測される潜在変数と、実態を観測出来る観測値により形成されるから、状態空間モデルは、非線形なマルコフ表現をもつ階層型トレンドモデルとして示される。即ち、求めるシステムエージェントモデルにおける状態成分行列を Y_t 、観測値成分行列を S_t 、状態として観測される潜在変数により形成されるトレンドモデル μ_t 、不規則リスク残差 W_t とすると、エージェント集群モデルは

$$\Sigma Y_t = \Sigma \mu_t + \Sigma S_t + \Sigma W_t$$

と表現され、かつ、その集群が外生資本再資本化クライアントにとっての最適性は、観測値成分行列の同時分布 ΣS_t の最大対数尤度と、予測誤差分散パラメータ数による ΔIC (赤池情報量基準) により近似される。

$$\text{MLML}(\Sigma S_t) = \text{Var}(\Sigma S_t) + E \Sigma S_t - E(\Sigma S_t)^2$$

$$\delta^2 f_t \equiv \text{Var}(\Sigma S_t)$$

$$\Delta \text{IC}(\Sigma S_t) = 2 \Sigma \log \text{MLML}(S_t) - 2 \log \delta^2 f_t$$

その際、非線形ガウス空間における分布近似フィルタリングが行なわれるならば、それがエージェント探索モデルにおける有意水準制約付状態空間モデルの同定に該当する。数値積分フィルタを用いる遺伝的アルゴリズムモデルを用いる有意水準制約付状態空間モデル同定でよく知られている状態階層次元制約は、本議論の社会モデルの仮説化に一定の限定化を要求する。遺伝的アルゴリズムモデルを用いる有意水準制約付状態空間モデル同定は、有限個エージェントのマルコフ遷移即ち、エージェントの成長操作(Growth Operation)、エンドースメントによる交差(Fertilization)、変異(Mutation)の遷移過程により表現される。この場合、表現されるモデルは、自己組織化モデルであり、かつ、密度関数の規格化モデルとして位置付けられる。即ちエージェント探索モデルとしての遺伝的アルゴリズムモデルの目的合理的議論は、外生クライアントの探索可能性議論である。

[3]. 遺伝的アルゴリズムによる外生クライアントのエージェント探索モデル

初期探索エージェントがパレート最適化モデルとする場合、非再帰マルコフ連鎖モデルによるエージェントの相対適応度 m_i は、赤池情報量基準により、

$$m_i = m_i / \sum_{j=1}^n m_j$$

$$m_i = [-2 \log L(\hat{A}_i; f_{emb,i}) + 2 B p_i]^{-1}$$

担し、 N_i は、対象とする初期エージェント候補集群のエージェント数、 $\log L(\hat{A}_i; f_{emb,i})$ は i 番目エージェント w_i の推定最大対数尤度、 p_i は w_i の複雑性を示すパラメーター数、 B は、バランスパラメーターである。 \hat{A}_i は m_i の推定パラメータ値セット、 $f_{emb,i}$ は期待されるエージェント垂下モデル。この場合、初期エージェント候補集群エージェントの多様なトポロジーを確保し、局所最適収束に陥らない為に、初期エージェント候補集群のすべての状態に対して一定の確率で状態の複製を行う。従ってこの場合、出力されるべきエージェントの相対適応度 m_i は、対象となるエンドースメント効率と相関を持つ。

垂下性ベクトル形成過程を遺伝的アルゴリズム特性表現により再表現すれば、エージェントの測地同位性に関する適応修正は、測地経路の干

渉度と垂下適合度の観点から表現出来る。エージェントの測地同位性に関する干渉度と垂下適合度は、干渉度がゼロならば垂下適合が存在するトレードオフ関係にある。期待されるエージェント垂下モデル $f_{cross}(X)$ でエージェント集団における干渉度の総量を示すこととし、 $f_{cross}(X)$ とすれば、

$$f(X) = \sum_{k=1}^m \sum_{k \neq l}^m f_{cross}(X_k, X_l)$$

$$f_{cross}(X_k, X_l) = \sum_{i=1}^n f_{cross}(X_k^i, X_l^i) + nc$$

$$f_{cross}(X_k, X_l) = 1 \rightarrow f_{cross}(X_k, X_l) < f_{conject}$$

$$f_{cross}(X_k, X_l) = 0 \rightarrow \text{otherwise}$$

即ち、 $f_{cross}(X_k, X_l)$ はエンドースメント経路 X_k と X_l 間の干渉度を求める関数となり、 $f_{conject}$ は垂下適合障害が発生するベクトル関数であり、 $f_{cross}(X_k, X_l)$ は、垂下適合の I/O 判定関数、 nc は残差項である。即ち、初期エージェント設計段階におけるクライアントが所有する仮説評価関数は、多様、即ち初期エージェント候補集群エージェントの多様なエンドースメントに関する微分化されたトポロジーを確保し、局所最適収束に陥らない為二階モデルとして表現する事が出来る。即ち、この文脈で一階モデルとしてのビルディングブロック形成モデル $f_{cost}(K)$ を示せば、

$$f_{cost}(K) = \sum_{i=1}^n f_{cost}(X_{cost}^i)$$

担し、 X_{cost} はビルディングブロック形成モデルにおける離散型エンドースメント連牽ベクトルを示す。この場合、遺伝的アルゴリズムのビルディングブロック形成によってなされるエンドースメント対象エージェント集群と、垂下適合障害仮説評価関数アルゴリズムの複数最適化生成手法の組合せによる探索生成の正規化は、遺伝的アルゴリズムのビルディングブロック形成モデルより以下の様に求める事が出来る。 $f_{cost}(X)$ において正規化の為のビルディングブロック形成モデルを持つレントコストを f_{rent} 、エンドースメント政策上計画化される想定レントコストを T_{GR} とすると、

$f_{rent} = 1 - \frac{f_{cost}(K)}{T_{GR}}$ よって、上記ビルディングブロック形成モデルを代入すれば、

$$f'_{rent} = \frac{f_{cost}}{\{ND(Y(X)_{rent})\}^n}$$

即ち、レントコストの最適化過程により、遺伝的アルゴリズム操作を実行することが出来る。ここで示される遺伝的アルゴリズムによるエージェントの遷移過程は、従って、時系列による遷移移行過程として、遺伝的アルゴリズムによる一連の遷移過程を示す事が可能となる。ここで、 f_{rent} 、 f_{cost} によって示されるものは、シンタクスなエージェント組織情報を含む組織情報である。また、本章で論じる、測地同位性の遷移移行過程モデルによって示す事が出来るエージェント組織情報の遷移移行過程は、当該する市場情報に対する遷移移行過程も、同様に示す可能性がある。

結節 インクレメンタリズムと経営意思決定情報の可視性制約

価値連鎖系を前提として予期する経営意思決定における倫理エレメントの機会費用評価の動学性は、Robertson⁽⁵⁾ らに議論の経緯をもつファイナンス制約即ち、プリンシパルの再資本化決定に関わるファイナンス媒介エージェントの機能制約のカテゴリとして議論することが出来る。外生市場に主たる連牽統制情報関係が存在するマイノリティエージェントは、統制倫理の運用も含む組織価値評価に関するプリンシパルベースのドライバの不在により、会計上、資本意思決定情報として数理認識されてこなかった。即ち、インクレメンタリズム、ファイナンス上の残差価値の文脈で、従来議論が存在するに過ぎなかった。本報告でいうドライバは、本来価値連鎖系を前提として予期する経営意思決定における機会費用評価の動学性は、エージェント組織、市場、会社法人組織に代わるプロジェクトのエージェント組織と、再資本化投資を享受する経済地域の社会階層/ヒラキの組織と制度構造、および金融機関構造という、媒介構造に相補性を持つものとして作らるものである。

エージェント組織連鎖構造は、一般化の際、エージェント組織機能の差異性を包含して論じなければならない。この場合、一般化における学知形成過程には、マイクロなインプリケーションに基づく設定プロセスのみでは充分でない。本稿で述べた動学的なバリエーションメカニズム設計問題は、会計モデルにおける、エージェント階層構造における組織経済主体の嗜好、技術パラメータに関して、パラメータ伝達のための変数の不足による経済主体組織間の完備契約が未達成の為、その解決に会計構造論上の問題の動機性があるというものである。動学的モデルで説明しうる組織モデルにおける会計情報の動学的均衡性の不在は、各経済主体の意思決定情報が十分交換可能なレベルにまで分化、分権化された情報市場の存在を情報の共有化メカニズムを前提とした、マクロスコピックな視点からのエージェントの分限化が未達成のため生起する。そして、この未達成問題解決の必要条件として、経営意思決定情報の、エージェント階層組織/ヒラキ構造における、マイノリティ倫理の共

有化の問題、エージェント階層組織の移転不可能なレントの検証問題が存在する。基本的に本稿は、大域化を前提としたポートフォリオモデルにおけるシタクシユアルな衡量性を階層連率性差異として暗黙的、内在的であつて、かつ対外的な通常の知識システムでない、狭義の知識システムとして位置付けるという前提の許で述べたものである。セマンティックに再整序されないウィークフォームに存在する知識カテゴリに関しては、少くとも KL 検定を含む一定の N 連続的な二次変換検定を設計する事により、ストロングフォームに置換が可能であつて、ポートフォリオモデルを、広義のセマンティック知識平面として切り取り論じる場合、白色ガウシアンモデルとして大域ポートフォリオ上のウィークフォームカテゴリに、一定の再置換化が議論上可能である。したがつて、ここで議論連鎖を期待される社会構造モデル議論は、今後予期されるアソシエーション社会構造モデルにおけるエンドースメント環境を包括したものである。目的的な後背を持つアソシエーション組織における一機需要性議論は、セマンティックに意味の交換性が担保されるという事を与件化する必要がある。

Biographicals

- (1)Lev.Baruch 1971 "On the use of Economic Concepts of Human Capital in Financial Statements" *Accounting Review* 46
- (2)Menga,Pamela, and Mark Klock 1993 "The impact of Intangible Capital on Tobin' sQ in the Semiconductor industry" *American Economic Review* 83
- (3)Pestoff.V.A. 1992. "Third Sector and Cooperative Services-An Alternative to Privation" *Journal of Consumer Policy* No.15
- (4)Prakash.P. and Rappaport.A. Information Incandance and Its Significance of Accounting.*Accounting Organization and Society* 1977.
- (5)D.H.Robertson "Theories of Banking Policy" *Econometrica* 8.June.1928 pp131-146.Banking Policy and the Price Level:An Essay in the Theory of the Trade Cycle,London:P.S.King and Son,1915.

References

- ◆Chambers.R.J. "The Possibility of a Normative Accounting Standard" *Accounting Review* 1976.
- ◆Chandhasekaran B: "Generic Tasks in Knowledge based Reasoning:High Level Building for Expert Systems Design" *IEEE Expert*. 1986
- ◆David.E.Goldberg: *Genetic algorithms in search, optimization and machine learning*. Adison-wesley 1989
- ◆Haykin S. 1999. *Neural Networks*. Macmillan. Colledge publishing New York
- ◆Lowe. D. 1991. On the inerative inversion of RBF networks :A *Statistical interpretation* *Second. IEE. International Conference on Artificial Neural Networks Conference Publication*. 349.
- ◆Moody.J.Wu.L.Liao.Y.Saffel.M. 'Performance Functions and Reinforcement Learning of Trading Systems and Portfolios' *Journal of Forcasting* 1998
- ◆Ng.Y.K. 1978. The economic theory of clubs: Pareto optimality conditions, *Economica*. 40. .
- ◆Steels.L: *Cooperation between Distributed Agents through Selforganization, Decentralized AI*.
- ◆Singer I. *Abstract Convex Analysis*. Willey - Interscience Publication, New York 1997
- ◆Rubinov, A.M. *Abstract convexity and global optimization*. Kluwer Academic Publishers 2000
- ◆Pallaschke, D. Rolewicz, S *Foundations of Mathematical Optimization (Convex analysis without linearity)* Kluwer Academic Publishers, Dordrecht 1997
- ◆Borwein, J.M. Preiss, D. *A smooth variational principle with applicattion to subdifferentiability and differentiability of convex functions*. Trans America Mathematics Society 303
- ◆Pitt. J.H. 'Multiple points of transient random walk' *Proceeding American Mathematics* 43 1974
- ◆P.A.Sabatier. "An Advocacy Coalition Framework of Policy Change and the Role of Policy oriented Learning Therein," *Policy Sciences*. vol 21. 1988 "TopDown and Bottom Up Approaches to Implementation Research - a Critical Analysis and suggested Synthesis" *Journal of Public Policy* Vol6.No1
- ◆K.N.Waltz: *Theory of International Politics* 1979. New York. McGrawHill
- ◆T.R.Kappen. "Bridging transnational relations back in": introduction " *Structures of governance and transnational relations*. Cambridge University Press, 1995.
- ◆Weick.K. "Educational Organizations as Loosely Coupled systems" *Administrative Science Quarterly* Vol21. 1976. pp1~19. J. Pfeffer. and G.R.Salancik "The External Control of Organizations: A Resource Dependence Perspective" Harper and Row - 1978
- ◆J.Rawls. 'A Theory of Justice' 1971. Harvard Press. Japanese J.J.Dewey 'Democracy and Education' *An introduction to the Philosophy of Education* 1916. Japanese translation version.
- ◆P.Bourdieu. *La Distinction' Critique Sociale du Jugement*. 1979. Japanese translation version.